

「スーパーマーケット」と「タコツボ」： イスラームをめぐる授業と 研究の現状と展望



もり やま てる あき
森山 央朗
(大学神学部准教授)

多彩すぎる担当授業

「スーパーマーケットみたいだね」と言われました。言ったのは、かつての同級生のマファルダです。彼女は、シリアの在ダマスカス・フランス・アラブ学研究所での同級生でした。2001年から2003年にかけて、私が、東京大学大学院博士課程の院生として、その研究所で在外研究を行っていた時期に、彼女はスイスのベルン大学大学院博士課程の院生として、やはり在外研究に来ていました。それから約10年後の2013年4月、私は同志社大学神学部に就職し、同年8月にトルコのアンカラで開かれた第4回中東研究世界大会において、彼女と再会しました。その時、同志社大学に就職したことを告げると、彼女は、常勤研究教育職に就けた私の幸運を喜んでくれましたが、どのような授業を担当しているのかという質問に対する私の答えを聞いて、冒頭の感想を述べたのです。

こうした感想が出るのも無理はないのです。現在、週に6コマのイスラームに関する授業を担当していますが、それらの主題は、啓典『クルアーン(コーラン)』やハディース(預言者ムハンマド(632年没)の言行に関する伝承)の概論、

古典イスラーム時代(10〜13世紀)のウラマー(イスラーム宗教知識人)に関する社会史研究、さらには現代の中東イスラーム情勢にまで及び、イスラームに関する様々なトピックの、まさに「スーパーマーケットみたい」な様相を呈しているからです。これを日本に関する授業に当てはめてみると、『古事記』や平安貴族社会から戦後政治までを1人の教員が担当しているようなものです。このような状況は、私がマルチな才能を持つているからではなく、日本のイスラーム研究の蓄積が未だに薄く、少ない研究者で多くの事柄をカバーしなければならぬことによります。同志社大学は、私立大学としては、イスラームを専門とする教員を多く抱えています。それでも、イスラームをめぐる激しく動く情勢と学生の興味関心に余力をもつて応えることは難しく、教員は、専門に直接関係する授業だけを行っていれば良いという状況にはなっていない。

専門的な研究と職歴と授業

私の研究の専門分野は歴史学で、研究のテーマは、「古典イスラーム時代の西アジア・ムスリム(イスラーム教徒)社会におけるウラマーの知的実践と権威の

社会史研究」です。ウラマーとは、『クルアーン』やハディースといったテキストの継承・読解と、それらをめぐる著述・議論を通して、イスラームの宗教文化の形成を主導してきた知識人たちであり、イスラームに則って社会を意義づけ、人々の信仰生活を導いてきた宗教指導者たちでもあります。私の研究は、千年くらい前の西アジアで、ウラマーがどのようにに著述や議論を行い、そこで形成された著作や知識人としての評価が、ムスリム社会に対する権威や影響力にどのようなつながっていたのかを、彼らが主にアラビア語で書き残した著作を分析することとで解明していこうというものです。

授業との関連としては、『クルアーン』やハディースの概論は、それらがウラマーの扱ってきたテキストであることから比較強い関連があります。さらに、研究と直接関連する授業として、ウラマーの社会史研究を講じています。こうした授業の受講者は、例年20名前後ですが、受講生の反応に目が行き届く適正な人数だと思っています。イスラームの宗教思想や宗教文化の細かい点に踏み込んでも、良くついてきてくれます。

他方、現代イスラーム情勢に関する授業には、毎年50名以上の登録があり、時

には100名を超えます。中東とイスラームに関して深刻な問題が連日報道されていることから、多くの登録があることは不思議ではありません。問題は、上記の研究を専門とする私に、現代情勢を解説できるのかということです。これには、同志社大学に着任する前、2010年4月から2013年3月まで、日本国際問題研究所という外務省系シンクタンクで中東イスラーム情勢分析担当の研究員をしていた職歴が活かしました。

この日本国際問題研究所への就職には、現代にも視野を広げようといった能動的な動機があったわけではありません。2009年に学位「博士(文学)」を取った後、研究教育職の公募に手当たり次第応募していたところ、たまたま拾ってくれたのがそのシンクタンクだったので。その結果、にわかに現代問題をカバーすることに、かなり苦しい時期でしたが、この間の知見を基に、現代中東イスラーム情勢に関する授業を準備しています。特に、中東イスラーム諸国の外交官や研究者、民主化運動活動家などと直接会って得た情報に依拠した解説には、多くの学生が強い関心を寄せ、前職での苦労が思わぬ形で報われているように思っています。

今後の展望

今後の展望としては、まずは自分の研究を地道に続け、実証的な成果を出していこうと考えています。専門的な研究は「タコツボ」と批判されることもありませんが、専門的な研究の進展に基づいて授業を充実させていくことが、研究教育職に就く者の本分だと思っております。そうした研究と授業をとおして、1次史料やファーストハンドの情報を精密かつ批判的に分析することから、独自の議論を実証的に組み立てることの重要性を、学生たちに伝えていきたいです。その一環として、アラビア語の原典史料を精読する演習も行っています。

さらなる展望としては、歴史学と情勢分析の両面でイスラーム研究に関わってきたので、日本におけるイスラーム研究の古典分野と現代分野の連携の一助となればと思っています。そして、日本のイスラーム研究が十分な厚みを持つたあかつきには、「スーパーマーケットみたい」に様々な事柄を講じるのではなく、「専門店」として、古典イスラーム時代の歴史学研究に集中できれば、より有意義で充実した研究と授業ができるのではと思っています。

アクティブラーニングの 試み



伊藤 高史
(大学社会学部教授)

私は2015年から同志社大学に着任いたしました。「表現の自由」や「ジャーナリズム」を社会的な観点から論じることを専門としておりますが、ここでは授業運営のことに書かせていただきます。教員の先生方には授業運営のご参考に、卒業生やご父母の方には昨今の大学事情を知る手がかりになれば幸いです。

「講義」というマスメディア

私はよく授業で、「メディア」とは何かと問います。多くの学生が「情報伝達的手段」と解答します。そこで「情報伝達的手段がメディアなら、学校や大学はメディアと言えないかな」と問いかけます。

通常の講義では、学問的な知識を伝達し、学生の知的関心を刺激することが重要な役目になるはずです。現在でも数百人、場合によっては千人を超える学生が受講している講義があります。こうした授業はまさしくマスメディアです。「マスメディア」であるところの特性通り、情報は教員から学生に一方的に流れるという形になります。しかし今日では、情報は世の中にあふれています。洋書も

自宅で簡単に入手できます。インターネットでは、世界的に有名な教員の講義が無料で配信されています。こうした状況の中で、講義の価値はどこに見出せるのでしょうか。率直に言って、学生の多くが、大教室での講義に価値を見出すことができていないようです。ですから教員は、学生の私語に悩まされることになります。

アクティブラーニングへの取り組み

こうした中で、さかんに推奨されているのが「アクティブラーニング」です。単純に言えば、「討議」を行うなど、学生が主体的に授業に参加するような工夫が求められているということです。学生同士に討議させると言っても簡単ではありません。必要な情報のインプットなくして、まともな討議ができるはずありません。討議のために毎回多くの課題を出す、というやり方は一案です。しかし、学生は多くの授業を履修しているの、どの教員もこのやり方を行ったらパンクしてしまいます。そこで、そこそこの負担で的確に情報を与えつつ、討議をさせる工夫が必要になります。

私の工夫のひとつとして、90分の授業

のうち25分程度を使って、8000〜1万字程度の資料を読ませ、その内容に対するテストに解答させるを行っております。情報を伝達するだけであれば、声を使うより、文字の方が大量に、しかも正確に情報を伝達できます。後で読み返すこともできます。最近の学生の欠点はノートをとることができないことです。1年生向けの授業でいくらノートのとり方を教えても、ほとんどの学生はそれを実践しません。ノートをとらなければ、授業で伝えられることは数週間後にはほとんど全て記憶から消し去られてしまうでしょう。プリントで配布すれば、そのようなことはありません。

10年ほど前からこの方式を始めました。きっかけは、某大学で非常勤講師として授業を行ったとき、その学生たちがいくら注意しても私語を止めようとしなかったことです。私は少々やる気をなくし、学生に資料を読ませてテストに解答させる時間を設けました。するとその間は、学生は静かに解答していました。それを見て、彼らは学習意欲がゼロというわけではなく、教員の話を理解できず、ノートをとることができないため、授業を聴くことができないのだと感じました。ア

クティブラーニングの本来の意味と外れるかもしれませんが、テストに解答しているときは、彼らは授業に参加しているように思えます。

実りある討議のために

右記の工夫だけでは、90分間の授業をもたすには十分ではありません。私は昨年、「院生の架空の対話」というのをつくり、それを配布するようになりました。授業では、3〜4人の学生でグループをつくり、架空の対話を段落ごとに交代して、声に出して読むよう指示します。その上で、こちらがつくった質問について、話し合いながら解答するように指示します。この架空の対話を通じて、基本的な学問的知識と、討議を行うためのヒントを与えます。この架空の対話は、1回あたり5000字弱です。1回の講義で1回か2回、この架空の対話を書いたプリントを配布します。このやり方は特に、「理論」や学問的「概念」を学生に伝え、それが具体的にどのように応用できるのかを伝えるために有効ではないかと考えております。

私の授業では1回につき、学生は1万4000〜2万字程度の文字を読み、討

議を行うこととなります。この文字数は、私の分野での論文1本の分量に相当します。私が授業で話す時間は10分程度です。今年の春学期の講義の受講生は150人で、実際には125人程度が授業に出席します。教室に入るときに番号札をとらせ、指定した席に座るように指示し、その席順に従ってグループをつくらせます。討議を授業に採り入れて以上、出席を重視する必要があります。共同学習ですので、遅刻には不寛容である必要があります。学生証をかざして出席の登録をする「出席カードリーダー」という装置があり、私はそれをつかって、「遅刻は10分までしか認めない。それ以上遅刻した者は、その回の授業は零点」と宣言しています。

授業を行うにあたっては毎年、試行錯誤の連続です。右記のものは決して完成形ではありません。どなたかいいアイデアがあればお教えいただければ幸いです。

日本初！ゼミでNPOを運営し、マーケティングの力で社会を変える



う りゅう はら よう こ
瓜生原 葉子
(大学商学部准教授)

これからの社会に対応した人材育成

学生たちが社会で活躍する頃、超高齢化が引き起こす医療・福祉問題、貧困・格差、環境問題など、山積する社会課題の影響を直接受けることが必至でしょう。これらの社会課題の解決を行政機関に任せるのではなく、非営利組織はビジネス手法を取り入れてボランティアに留まらない自立的な仕組み作り、企業は社会的価値を創造すること、さらには共創することが求められています。

商学部においても、社会課題の解決に資する商品・サービスの開発、それを提供するための仕組みの開発、新しい価値の普及、望ましい行動への変容の促進を可能とする人材育成が必要不可欠と考えられています。

「社会価値を生みだし広める人材」を育成する体系的プログラム

瓜生原ゼミのテーマは「ソーシャルイノベーション」。それを実現する『独自の専門性と幅広い教養を身につけ、多様な分野を結び付けることで、新たな価値を生み出し、価値を社会に広める人材』

の育成を目標とし、2年半の体系的なプログラムを構築しています。

2年次秋学期の「超える」シリーズでは、分子生物学、防災、救命救急、地方行政などの専門家をお招きし、講義を受けた後、「自分たちの専門性で何ができるのか」について討議を行います。視点の多様性を理解する力、異分野の情報を咀嚼し自分の言葉で表現する力、自身の専門性との融合を試みる力の習得を目指しています。

3年次では、ゼミで設立したNPOで具体的な社会課題の解決に取り組みます。ソーシャル・マーケティングの理論と研究結果に基づいた戦略を実践し、人々の意識と行動に働きかけます。さらに、組織マネジメントの理論に基づき、学生自身の手でNPOを運営し、困難な課題に一つ一つ向き合い、その解決に尽力することで、「理論知と実践知の融合」を実現しています。

4年次では卒業研究に集中します。私は、20年以上の実務マネジメント経験から、論理的思考と科学的検証が可能な人材が社会で必要とされていることを実感しております。3年次の感動と学びを理

論に結びつけ「論文を書く」経験を通して、これらの確実な習得を支援しています。

「想いをカタチに」Share Your Value Project

日本初のゼミ発NPOの名前は「Share Your Value Project」。一人一人が様々な社会課題に向き合い、主体的に深く考えて行動し、その価値ある考えや行動を共有し、認め合い、それらが連鎖する社会を創りたいという思いを込めました。

ミッションは「マーケティングの手法を用いて人々の意識や行動を変え、意思表示を当たり前にすること。具体的なテーマは、運転免許証や保険証に記載欄がある「臓器提供の意思表示」です。命について家族と話し、正しい知識を得て想いをカタチにする（YESかNOか明示する）ことは必要な行動なのに、日本の意思表示率は12・6%。その結果、いざという時、限られた時間で臓器提供をするか否かの決定をする家族に心的負担を強いるという課題が生じています。少しでも多くの人の意思表示行動を促進するため、実態調査を行い、興味がない人

情報不足で意思決定できない人、心は決まったが不安があり表示ができない人など、その段階に応じて最も効果的な訴求方法を考え、実践しています。

『MUSUBU2016』キネズに挑戦！

2016年10月16日グリーンリボンデー（意思表示の大切さを伝える日）に『MUSUBU2016』を大学今出川キャンパスの寒梅館にて開催します。大切な人と一緒に想いをカタチにして、家族や地域の人々を結ぶ一日です。

その最大の魅力は「臓器提供の意義について知る」授業を、世界最大人数で受けて『ギネス世界記録』に挑戦すること。臓器提供意思表示について正しく理解したうえで、一度に大人数が同時に意思表示を行うことを可能とし、「意思表示」大切な人へのメッセージを強いインパクトをもって社会に伝えます。人々のイメージの変化を測定するアクションリサーチを意図しています。

学生たちは、各自プロジェクトリーダーとなり、夏休み返上で準備を進めてきました。責任をもって社会に関わることで、座学にはない多くを学んでいるよう

です。どうぞ、彼（女）たちの努力の成果を見届けるため、『MUSUBU2016』に足をお運びください。

学生とともに挑戦し成長し続ける

このような体系的な育成プログラムを通し、学生たちには、世の中の様々な社会課題に思いを馳せ、必要な知識を自発的に得て深く考え、勇気をもって行動してほしい、すなわち『社会的価値を創造し広める人材』になつてほしいと願っています。その一人一人の意識と行動の変化が積み重なり、より良い社会に近づくと信じています。学生たちに「当たり前を超えての機会」を提供すると同時に、私自身が率先して未知の分野にも視野を広げ、リスクを恐れず挑戦し続ける姿を示し、学生たちの大学での学びが人生の糧となるよう、真摯に向き合い、共に成長したいと思っています。



心の教育の 普及を目指して

いし かわ しん いち
石川 信一
(大学心理学部准教授)



私と心理学

出前講義に行くと、高校生からよく聞かれる質問があります。「なぜ心理学を勉強しようと思ったのですか？」

私が心理学を専攻しようと考えたきっかけは、消極的な理由とそれよりはもう少し積極的な理由があります。消極的な理由は、高校までに勉強した教科の中で熱中できるものがなかったからです。怠惰な学生であった私には、高校の延長のように思えるメジャーな学問よりも、新鮮かつ実体験とつながりがある学問の方が魅力的に映りました。

もう少し積極的な理由は、子どもが好きで、子どもの成長を支援する仕事をしたかったからです。その中でもつらい思いをしている子ども、困っている子ども達を手助けできたらと考えていました。その後の研究や実践活動は、紆余曲折、四方八方に進んでいきましたが、当時の思いは少なくとも私の今の仕事の根幹をなしているのではないかと思います。

子どもの心を巡る現状

今日、子どもの心理への注目日は日に日に増しているように思います。小中学校

にスクールカウンセラーが配置されるようになって、およそ20年が経過しました。ここ数年の間に大きな災害、不慮の事故や事件が起きるたび、スクールカウンセラーが派遣されたというニュースを聞くことも珍しくなくなっています。また、2013年には、いじめ防止対策推進法が交付され、いじめの防止、早期発見、いじめに対する措置についての指針が示されています。さらに、小学校では2018年度、中学校は2019年度から道徳が教科化されることになっています。システムの面から、子どもの心の発達を支援していこうという取り組みは着実に増えてきていると言えるでしょう。しかし、現状が好転しているというような感想が現場から聞かれることは、残念ながら多くありません。学校教育や児童福祉に携わる先生方は、一様に子どもの心の問題の深刻さや複雑さ、あるいは対応の難しさを口にしています。もちろん、問題を一気に解決してしまうような特効薬は存在しませんし、さまざまな対策によつて大幅な悪化が防止されているのかもしれませんが、しかしながら、もしかしたら時代は発想の転換を迫っているのかもしれない。

私たちの研究の紹介

私たちの研究室では、外部の研究機関と連携しながら、メンタルヘルス予防プログラムに関する研究を行っています。このプログラムでは、小中学校の授業時間をお借りして、児童生徒の皆さんに、心理学の知見を活かした授業を受けてもらっています。

授業は学級担任の先生が実施します。担任の先生は必ずしも心理学の専門家ではありませんので、授業の指導案は大学のスタッフが準備します。ただし、授業計画は学級の実態に合ったものでないと意味がありませんので、こちらの考えた指導案について先生方と話し合い、修正したものを採用します。大学院生、大学生が授業の補助にあたることもあります。

子ども達はこの授業から何を学ぶのでしょうか。心理学の研究では、人がなぜ不安になるのか、落ち込みやすい特徴にはどんなものがあるか、怒りっぽいときに考えていることは何か、といったことを調べてきました。これらの知見を応用して、どのように考え、どのように振る舞うことができるのか、心の健康を保つことができるのか、あるいはストレスを切り抜けることができるのかといったこと

が示唆されています。風邪をひいたらどうしたらよいかは皆知っていますが、「心の風邪」について習うことは残念ながら多くありません。

例えば、人間関係の問題は、児童思春期の子どもの心の健康に大きな影響を与えることが分かっています。メンタルヘルス予防プログラムでは、社会的スキル訓練（ソーシャルスキル教育）としてこの話題を取り上げます。まず、具体的に子ども達が困ってしまうがちな場面を取り上げ、そのときの問題について考えてもらいます。次に、上手くやれている例と、上手くいかない例を寸劇で子ども達に示します（図1）。その違いについて考えてもらうことで、成功するためのポイントを整理するのです。そして、そのポイントに従いながら、実際に声かけしてもらったり、振る舞ってもらったりする練習を順番に実施します。この実際の体験が非常に重要な役割を果たします。最後に、それぞれの良かった点をフィードバックしてもらうようにします。

これからの心の教育の話をしよう

これからは、大きな出来事がある度にハード面を変えろという「対処」ではなく、未然に防ぐという「予防」の発想に

力を入れていくことが大切だと考えます。緊急時ではなく、平時にこそ未来へ投資するという発想に変えていけないでしょう。また、新たな取り組みは「導入」することを目標にするのではなく、成果を客観的に「評価」したいところです。私どものメンタルヘルス予防プログラムでは、このような評価に基づき改善を図ってきました。現場が多忙であればこそ、各々の取り組みを評価し、それに基づき取捨選択すべきであると考えます。

心の教育のエビデンスを示すことが、私たちのこれからの使命であると自戒の念を込めて記しておきたいと思っています。



図1 実際の中学校での授業の様子（大学院生による授業補助）

都会小説を楽しむ

かざ ま ま き こ
風間 末起子

(女子大学表象文化学部教授)



田園から都会へ

私の研究分野はイギリスの19世紀の作家トマス・ハーディである。ハーディの自然描写は秀逸だが、ここ10年以上、都市を描いた小説に興味がある。以前は、イギリスに行けば必ずカントリーサイドに出かけていたが、最近はおつぱら都市のほうに心が向いている。2年前に在外研究の機会を得てイギリスに滞在した折も、時間があると昔の工業都市ばかりを訪ねていた。

住んでいた街が古い中世の町ヨークであったので、そこから日帰りで行ける都市、例えばリーズ、シェフィールド、マンチェスター、バーミンガム、ニューカッスルなどに出かけた。田舎の魅力に取りつかれたのも小説がきっかけであったが、都会に惹かれたのもやはり小説から



ニューカッスルのミレニウム・ブリッジ

だった。マーガレット・ドラブルの小説『中間地帯』(1980)を読んだ時、目の覚めるような思いがした。次はロンドンの俯瞰図である。

一二階の窓からロンドンの街の光景が広がっていた。遠くには聖ポール大寺院、シテイ、その下や近くには網の目のように、通りや裏庭、袋小路、用水路、倉庫、煙突、鉄道線、詰め込まれたような小さな工場が見えていた。無計画でゴタゴタして、ひどくうつちやられて入り組んでいた。連結し巻き込まれて繋ぎ合わされて、新旧が並んで積み重なって、ゴタ混ぜで、老朽化するも修復されていくいろいろなもの。ロンドン、どうしてこの街に飽きることがあろうか。『中間地帯』

黄金色に染まるロンドンの夕景を見ながら、主人公のケイトは、都会は難然としているが街路と裏庭、用水路と線路が入り組んでつなぎ合わされていることに気づく。すべての道はコネクトしているのである。この接続の眺めは、ケイトの目には人間の信頼関係の俯瞰図として映る。新旧は相並んで存在し、常に衰退と

再生をくり返し、無関係に見えるものが接続しているから、一見関係のないものが組み合わさった「都会のコラージュ」を創り上げているように見える。



シェフィールドの駅と背後のパーク・ヒル (アパート)

都会の中で接続する

だが、このような都会の捉え方は、小説世界の美化であり、想像力によって着色された理想の姿と思う人も多いだろう。それに遠くから見れば喧噪や混乱も美しいし、煩わしいこともない。だが、ケイトの友人イヴリンは、都会の煩雑さや危険を承知しているからこそ、「危険な場所が人が歩けば歩くほど安全になる」と言っている。都会の安全が人々の信頼関係の上に成り立つという考え方を堅持している。イヴリンは、車窓から見える貧しい地区の景色にも、ゴチャゴチャの寄せ集めにせよ、太陽の光に照らされると多様

性のもつ豊かさがあると感じ取る。イヴリンが日々、ソーシャルワーカーとして闘っている対象はロンドンの貧困や暴力であるが、絶望に陥らないためにも彼女の視点は柔軟であり、地に根も張っている。

ブツブツの小さな穴のあるススだらけの煉瓦、つぶつぶの光った石が点々と入ったコンクリートの道路、広告ビラが貼られたトタンの掲示板、ペンキがはがれた木の扉、コケが垂れ下がった配水管。工事中の道路の穴はそのまま、さびて変色した水道栓がむき出しだ。それに地下の配管は油まみれの変なカーキ色のボロ切れでぐるぐる巻きにされている。

グニョグニョしたビニールのゴミ袋と、そのとなりに直立不動で突っ立っている筋ばった灰色のゴミ容器。『中間地帯』

断片化を恐れない

都会は多様性を許容する場所である。同時に、都会では人は自分が浮遊し断片化したピースのようだと感じ、孤独を実感する。ところが、ケイトは都会生活の

断片化を恐れない。都会の空間の中で浮遊する女性の多様性と断片はコラージュ模様であるから、統合し整理する必要がない。自分の視点を他者の視点に向ける複眼性をもっていれば、人と結びつくことができるし、単なるピースとしての自分の存在も尊いものと肯定できる。



シェフィールドの窓のないビル

もう一つのドラブルの小説『氷河時代』(1977)の中に登場するビルやアパート群を見るためにシェフィールドの街を訪ねてみた。そのビルは古い市庁舎や立派な大聖堂に混じってキラキラと光って建っていた。鱗に似た金属製の外壁に被われた窓のないビル、そして駅近くに樹木のように群生するパーク・ヒルという名のアパート群。ドラブルの小説を読んでいると、私にとつての都会は未だに混乱と焦燥の集積にすぎなかったと思う。

良心を大切に、社会と自分を つなげて考える授業づくり

なが せ たく や
長瀬 拓也
(小学校教諭)



1. 「良心」を大切に小学校として

同志社小学校は、開校10周年を迎えました。新島襄先生の言葉である「一人一人は大切なり、一人は大切なり」の通り、子どもたち一人ひとりを大切にすることに教育の基本としています。また、谷川俊太郎氏が作詞した校歌に「えらい人になるよりもよい人間になりたいな。同志社のわたしたち」と書かれているように、他者への優しさや思いやり、感動、感性、そして良心に従いながら、学びの過程を大切に、思考力や判断力、コミュニケーション能力、自主性や道徳性といった人間力の育成を目指してきました。その例として、教科指導に捉われない「道草」の時間を設定し、児童一人ひとりの興味関心を出発点として、子ども達自身で研究テーマを決め、まとめ、発表する「道草研究」を行っています。また、1年生の時から宿泊を伴う体験活動があり、その集大成として6年生ではアメリカへ行き、アーモスト大学訪問や現地小学校、ボストン子どもミュージアムでの交流などを行います。小学校の行事や活動一つひとつにも、いわゆる「新島（同志社）スピリット」が息づいていると言えます。

2. 教科指導の中にも「良心」を

同志社小学校における各教科の授業の中でもその精神は大切にされています。ここでは、社会科を例にとり、総合的にどう発展していくか一例を示します。同志社小学校では、社会科に意欲的に取り組む子が多く、単元を終えての学習感想をまとめると、1ページにわたって学んだことや考えたことを書く子もいます。社会的現象に対して知的好奇心が強く、積極的に学習に関わろうとする子も少なくありません。

そうした中で、ただ内容や知識を暗記するだけではなく、自分や自分たちは「何ができるのだろうか」「何をしていけばよいのだろうか」と考え、提案できる子に育てていくことを目指しています。働く人たちの工夫や努力に対して他人事の知識ではなく、常に自分の生活に置き換えて考え、生きていく知恵として学んでいくような子に育てていきたい。それがこれからの日本社会を考えながら、社会の一員として、リーダーとして、社会の出来事と自分たちを結びつけ、行動に移していくための基礎を身につけていくことにつながっていくと考えています。

3. 教科と「道草」の時間をつなげて

2015年度は、社会科の授業づくりを考える上で、道草の時間や行事の「活動」をつなぎ、総合的に学ぶという意識をもち、実践に取り組みました。5年生では毎年、夏休みに北海道宿泊体験学習として、新島襄先生の願いにふれながら、函館散策や体験学習に加え、北海道長沼町で分宿し、農業体験を行っています。今まで取り組んできたこうした行事活動をより高めるため、「道草」の時間に「北海道研究」として、北海道について自身が興味関心のあるテーマを一つ選び、調べ、ファームステイ先の農家の方にレポート発表をすることにしました。



一方、社会科として、北海道長沼町の農業を中心に教材化し、授業で取りあげました。今まで知らなかった自然条件と向き合う人々の取り組みの姿を学ぶことを通じて、自分たちが住む京都や大阪の生活についても改めて気づくことができると考え、長沼町のファームステイにも関わる事務局の井戸沼忠博さんに取材し、長沼町の魅力について教えていただきました。それが「長沼の大豆づくり」であり、長沼町は大豆生産で北海道1位の収穫量を誇っていることを知りました。そこで、このことを授業で取り上げ、「なぜ、長沼町は大豆づくりが全国2位（北海道1位）なのだろうか」という疑問を追究し、学び合いを深めていきました。資料を通して調べていくと、品種改良やブランド化など、道のりは決して平坦なものではなく、多くの努力を必要としたことを知りました。また、大豆の生産量を比較すると、京都の市場などでも北海道の大豆を多く扱っていることが分かりました。そうした気づきの中で、授業の最後にこれからの私たちは何をしていけばよいか考える時間をもちました。教科の授業と「道草」をつなげることににより、働く人から知識的に学ぶだけに終わらず、さ

らに一步踏み出し、自分の生き方に迫ることもできたと考えています。

4. まとめとして

長沼町の農業から気候の違いやそれに合わせた工夫や努力などを学んだ後、夏休みによいよ北海道に向かいました。広大な自然の中で、ファームステイの方にとっても温かく接していただきながら、子ども達は北海道について体感的に学ぶことができました。そして、

①社会科の学習（日本の農業）と道草の授業（北海道の追究）が単元構想の段階から統合的に練り上げられたこと

②追究の対象を、夏の宿泊体験学習で訪れる町としたことで、学びの延長とファームステイがリンクできたこと

によって、社会科と行事と道草が連動し、長沼町で農業の素晴らしさ、気候を活かした生産の工夫をより深いレベルで理解する学びにつながったと考えています。これからも同志社の理念とする「良心」と社会と自分をつなげる授業づくりを追究し、毎日の礼拝や日々の取り組みによって「良心」の種が、少しずつ子ども達の心に広がっていくことを目指していきます。